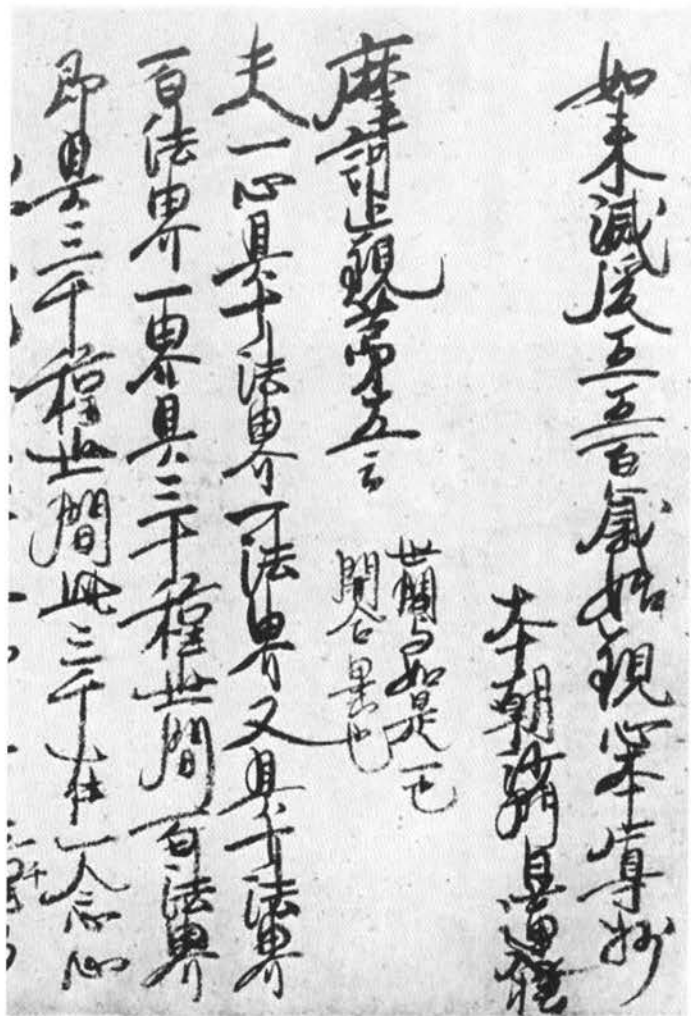




今月の御聖訓



（如来滅後五百歳に始む観心の本尊抄）  
如来滅後五百歳に始む観心の本尊抄

本朝沙門日蓮撰

（摩訶止観第五に云く「世間と如是と一なり、開合の異なり」）  
摩訶止観第五ニ云ク「世間与ト如是ト一ナリ也。開合ノ異ナリ也」

（夫れ一心ニ具ス十法界ヲ。一法界ニ又十法界ヲ。）  
夫レ一心ニ具ス十法界ヲ。一法界ニ又具スレバ十法界ヲ。

（具すれば百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば百法界に）  
百法界ナリ。一界ニ具スレバ三十種ノ世間ヲ百法界ニ

（即ち三千種の世間を具す。此の三千、一念の心に在り。）  
即チ具ス三千種ノ世間ヲ。【此ノ三千、在リ一念心ニ。】

【観心本尊抄 全集二三八頁】

目次

今月の御聖訓

卷頭言	菅野憲道	1
「『観心本尊抄』その一（題号釈）」	菅野憲道	2
御書と日興上人〔195〕	松田銘道	6
【寄稿】『日蓮遺文解題集成』発刊余話（その二）	山上弘道	8
読書案内『日米開戦 陸軍の勝算』	松田銘道	13
【採過拾新録】「超人・奇人 清野謙次博士について」		14
		18
節分会住職挨拶		21
三月の行事 弥生詠草 恵日俳壇		

# 巻頭言

## 百年の暗室

菅野 憲 道

能登大地震は、道路・電気・水道等のインフラ復旧が遅れ、被災者の方たちには寒さと闇夜の中を何日も過ごした人がいる。東日本大震災や熊本、阪神などの被災で停電、断水等を経験した方々も、改めて当時のことを思い出し、電気や水道が復旧したときの喜びもよみがえったに違いない。

思うに文明とは、文字通り明かりをともし夜をなくし、不安を解消してきた照明の進化の歴史でもあった。現代はLEDの登場もあって、都市部では不夜城という言葉に違和感を覚えるほど、いずこも明るいのが当たり前のようになってきた。

しかし、もう一つの闇の方はどうだろうか。

仏教では無明といって、人生や自身について何も知らない状態をさす。あらゆる物事は常に変化して、固有不変のものはない（無我）が、多くの人は心身こそ実体のある絶対的な存在と勘違いして我見をおこす。この自己に無知であることが愚痴となり、煩惱の生ずる苗床となる。「自己は何者か」など思っても見ないから、目先の五欲に夢中になって空しく生を終える。これでは文明以前、動物達と変わりはない。「己れは何処から来たって何処へゆくのか」、知ろうともしないから心の闇は深まるばかりである。

法華経に説く真実の自己とは、一念三千といって、瞬時のかすかな心の働きさえも法界全体との因果関係、一体性、相関関係にあるのであり、容易に人智をもって計ることができないが、ありがたいことに「一念三千を識らざる者は、仏、大慈悲を起こし、五字の内にこの珠をつつみ、末代幼稚の頸に懸けしめたもう」と宗祖は仰せられている。南無妙法蓮華経と信じて唱える修行によって心の闇を破って妙法蓮華経を感得できるのである。

「百年の闇室に火をともしすが如し」（「総在一念抄」）



お講講話(要旨)

拝読御書 「観心本尊抄」(全集 一三三八頁)

「観心本尊抄」その一 (題号釈)

菅野憲道

《濁悪の世を照らす唯一の燈明》

今日は、実質的には第一回目の講義になりますので、まず最初に題号から入りたいと思います。

普段は省略して「観心本尊抄」とか「観心の本尊抄」と呼び習わしておりますが、正式には御直筆の正本に、

「如来滅後五百歳始観心本尊抄」

としたためられておりますから、そこにこめられた御意を推し量る意味でも、省略せずに読むべきかと思えます。

最初に「如来滅後五百歳」とあるのは、釈尊ご入滅後に仏法が世に行われる様相を、正法千年、像法千年、末法万年の三時に分けて説かれた「末法思想」に基づくものです。

この末法三時説は多くの経論に見られますが、大集経には、より詳しく解脱堅固、禪定堅固、読誦多聞堅固、多造塔寺堅固、鬪諍言訟堅固の五箇の五百年を挙げ、滅後二千年を経て、末法五百年に入れば、その外見の繁栄とは裏腹に、仏法は形骸化して鬪諍が盛んになり、正法は滅びることが予見されており、仏

教の歴史もほぼそのように推移してきたようです。

また末法思想は、平安期から鎌倉期にかけて日本人に大きな影響をもたらし、新、旧仏教の改革運動も、その危機意識がもたらしたものであるという一面もあります。

これは現代にも通用する問題でもあります。道義は廃れ、貪欲は肥大して、私利私欲の渦巻く世にいたずらに日を送り、空しく生を終える人々……。五濁悪世は眼前に広がっていても、「自分だけは大丈夫」という根拠のない樂觀にすがって一時の慰安を五欲に求める時代……。

世には正法が廃れて邪法がはびこり、人々はエゴと貪欲心に追い立てられ己の内なる地獄を知らうともしない。こうした終末的な現代人の危機を回避する方策はあるのか、その答えは本書に示されているともいえます。

《如来滅後五百歳の典拠》

次に、「如来滅後五百歳始観心本尊抄」という書名の、法華経の典拠ですが、これは二カ所考えられます。

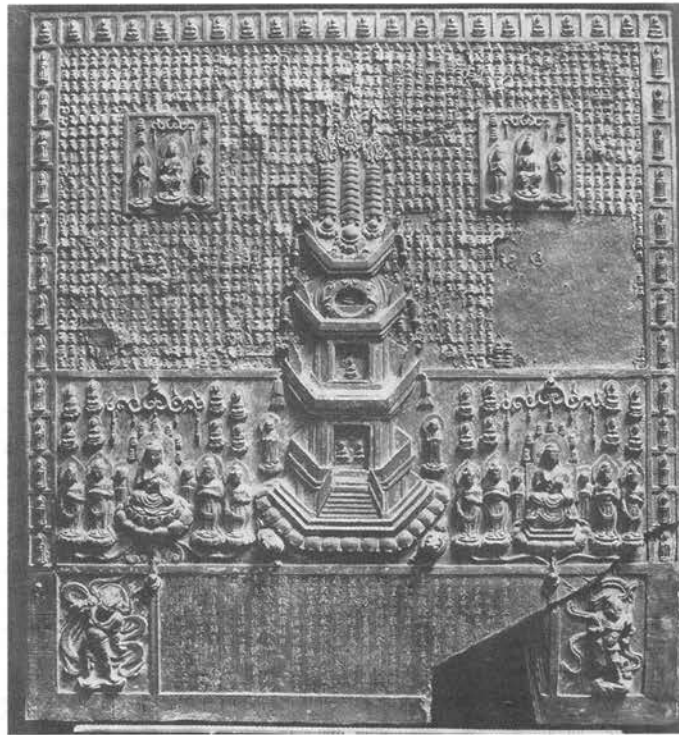
まず一箇所は神力品第二十一の、  
「於我滅度後、応受持斯經」

が挙げられます。もう一箇所は葉王品第二十三に、  
「我滅度後五百歳中、広宣流布、於閻浮提、無令断絶」  
とあり、いずれも時・機・応・法の四事が合致しております。

このことから、法華經の説くところによれば、釈尊は入滅されるにあたって、教化してきた弟子や有縁の衆生には順に記別を授けて成仏の保証をなされ、釈尊一代の説經もようやく大団円の終幕を迎えたかに見えました。ところが、それでは釈尊の化導に縁の無かった人や、敵対者、不信者は無仏の娑婆世界に取り残されることになります。末法の衆生も見放されてしまうのでしょうか？それでは無縁の慈悲を体する仏の行いとしては不平等で、かつ無慈悲極まりないものとなりかねません。

しかし法華經の教説はここから一気に転換し、大がかりな舞台回しが行われるのです。

まず宝塔品第十一では、大地の中から巨大な宝塔が涌现し三世十方の諸仏が来集し、娑婆世界は清められ（三変土浄）、二仏並坐という誰もが予想もしなかった光景が一気に展開してい



虚空会に多宝塔が出現（長谷寺銅板法華説相図）

きます。虚空会の儀式という壮大で信じがたいスペクタクルが演ぜられ、法華本門の新たなドラマが始まるのです。このことは、また後日触れますので今は省略しますが。ただ簡略に申しますと、釈尊が入滅なされるのは「方便現涅槃」とあるように、仏は不生不滅、久遠から已来常住の壽命（このかた）を持たれておられますが、もし仏が常に姿を見せると、

徳薄垢重の衆生は、仏をぞんざいに思い、敬う心もなくなるので、方便を以って涅槃を現するのであるとして、明快な生死一如の生命觀を示されていることを付言しておきます。

### 《開目抄と観心本尊抄》

ところで、文永八年の竜口法難後に佐渡送りとなった大聖人は雪に閉ざされた塚原三昧堂で過酷な冬を越し、翌年二月にかけて「開目抄」を著され、四条頼基殿に贈られます。その後一の谷入道の預かりに居を移され、文永十年四月には「観心本尊抄」を書き上げられて富木常忍殿などに送り給ります。またこの後に十界互具の本尊を図顕されております。

その「開目抄」の冒頭で、大聖人はまず、

「夫れ一切衆生の尊敬すべき者三つあり。所謂主師親これな

り」(全集一八六頁)

と筆を走らせて、人として最も敬うべきものは主・師・親であり、その意味で結論からいえば、末法に寿量文底の妙法蓮華經を弘宣する法華經の行者日蓮こそ、仏滅後の大導師であるとの宣言です。「我日本の眼目とならん」等と仰せられた三大誓願も、日本国一切衆生にとつて即三徳を具えた法即人の本尊たることを開顯されたものなのです。

次いで「観心本尊抄」の冒頭には、

「摩訶止観第五に云く、夫れ一心に十法界を具す。……」

(全集二三八頁)

と、天台の終窮究竟の極説と称される一念三千の出処を取り上げ、五字七字の妙法蓮華經こそ事の一念三千の法体であり、この妙法蓮華經こそは人即法本尊にして人法一箇の本尊たることを明かされたのです。

本尊仏については人格と身体を具象化した人本尊と、法華經を法身の舍利というように妙法蓮華經そのものを仏身とみる法本尊の形式がありました。この仏と法は一体で一幅の曼陀羅に図顯されて人法一箇の本尊と伝えております。真理・法とはなかなか表現が難しいものですが、根本として尊崇されるべき法と人は一念三千即自受用身としてそのまま因果徳を具えた妙法蓮華經の仏身となるのです。そこから「開目抄」と「観心本尊抄」も表裏の関係と見て、「開目抄」は法に即しての人の本尊、「観心本尊抄」では人に即しての法の本尊として、両書は教義的にも重要な位置づけがなされるのです。

また「観心本尊抄」は前半と後半では、立脚する次元が異なる

り、前半では法華本門の教主釈尊が中心となる「在世の本門」の次元で法門が語られます。一般的な法華經の理解からいえば、教主釈尊を本尊とする説に惑わされやすいのですが、大聖人は像法時代の天台教學をそのまま継承したわけではなく、むしろ小乗・権經・爾前經・迹門・在世本門の教法を超克した「末法の本門」に立って、結要付属を受けた上行再誕・日蓮大聖人が出現し、三大秘法を弘宣して実証なされたものであり、当然教主釈尊の化導の範囲と上行菩薩の領域では国土も教法も行法も異なってくるのです。前代未聞とか未曾有というのは、次元の異なることを意味しているのです。

#### 《題号の読み方に含まれる重大な意味》

本書の題名一つとっても深い意味が込められております。

「如来滅後五百歳に始む観心の本尊抄」と読むのですが、この読み方に、末法に上行菩薩が出世して始める観心の本尊抄という意味が具わってくるのです。

当たり前のようなことをと思われるかもしれませんが、改めて確認するのは、すでにいろいろな読みがあるからです。

「観心本尊抄」には古くからいくつもの註釈書があります。

「録内啓蒙」(安国院日講)

「忠抄」(八品派日隆の弟子日忠)、

「常抄」(富木常忍—實際は孫弟子の日祐著)、

「辰抄」(日興門流・京都要法寺日辰)、

「観心本尊抄拔書」(富士派・保田妙本寺日我)

その他、いずれも違った訓点が施されているのです。



〔御書と日興上人（一九五）〕

「立正安国論」書写と「安国論問答」（一二九）

松田 銘道

前回は、大黒喜道師の「理事の一念三千と妙法五字の関係」との論文から、「妙法蓮華經の五字」の内実の変遷過程についてみてきました。引き続き、大黒師の論文についてみていきます。同論文の「おわりに」、「妙法蓮華經の五字」について、

「『妙法蓮華經の五字』には一貫して、本尊としての五字Ⅱ曼荼羅本尊と唱題修行としての五字の二意が含まれるもの、文永十一年（一二七四）の「法華行者値難事」および「法華取要抄」から建治二年（一二七六）七月の「報恩抄」にかけて一時開花し、闡揚された三大秘法の『本門の題目』の場合は、それがどちらかといえば傍意の題目修行としての五字に限定されて用いられていることには、一往の注意が必要である。」

と、①「本尊としての五字」Ⅱ「曼荼羅本尊」、②「三大秘法の『本門の題目』Ⅱ「題目修行」との「二意が含まれ」、③は「傍意の題目修行としての五字に限定されて」いるとし、「注意が必要」とコメントしています。

「注意」すべきことに関して具体的なことは示していませんが、翌年、「宗祖ご一代における妙法五字の内容的な変容について」（『興風』三〇号）との論文では、「二意」に関しては新たな視点から考察しています。そのことが「はじめに」に、  
「今回私が「宗祖ご一代における妙法五字の内容的な変容について」という……論題を選んだ理由について……私は「理事の一念三千と妙法五字の関係―法体二重説・三重説に触発されて―」という、

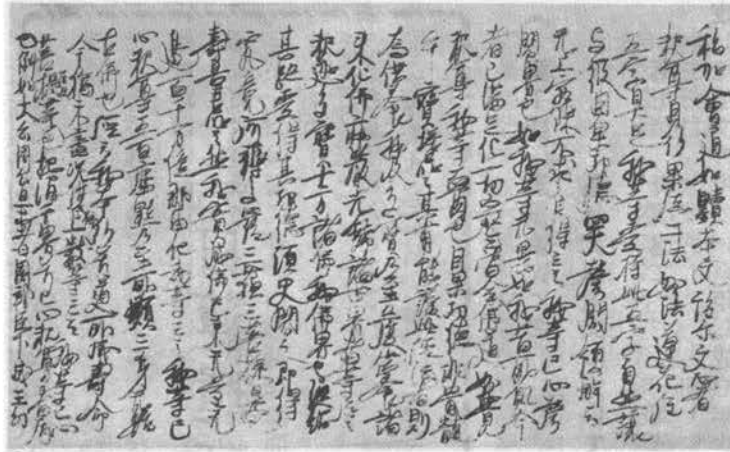
短い論文のようなものを掲載していただいた。……しかるに、その論攷を作成している最中に、これを一念三千と妙法五字の関係という分かりにくい問題ではなくて、「妙法蓮華經の五字」そのものを主軸において宗祖一期の化導のおよそを考えて見ると一体どうなるのかと思ひ、自分なりに考え直してみたところ、思いの外に大雑把ながら一通りのイメージを得ることができた。」

と、『妙法蓮華經の五字』そのものを主軸に「宗祖一期の化導」を考察しています。同論文の構成は、「一、宗祖の生涯を貫く妙法五字流布の確認」「二、初期の内容を付度する」「三、本門という重要素。理から事へ」「四、竜口法難でもたらされた『日蓮Ⅱ不輕菩薩』の自覚に伴う要素の付加」「五、上行菩薩の自覚を獲得する過程での要素の付加」「六、身延入山期前後の付加」「七、順縁の行者の唱題は名字即という要素の付加」「八、積尊本尊ではなく曼荼羅本尊正意という要素の付加」となっています。  
これらから順次見ていきますが、「理から事」、「日蓮Ⅱ不輕菩薩」、「順縁の行者」、

「曼荼羅本尊正意」等の視点からのアプロ  
ーチは、従来の方法とは異なります。

たとえば、『日蓮聖人遺文辞典・教学  
篇』（身延山久遠寺・平成15年10月13日、  
以下『教学篇』と表記）では、「妙法蓮華  
經の五字」との項目を設け、

「積尊が末法の衆生を救済するために上  
行菩薩をはじめとする本化地涌菩薩に別  
付属された要法。「法華宗内証仏法血



『観心本尊抄』（真蹟・表裏記載十七紙・中山法華経寺蔵）第十八紙。  
『日蓮聖人遺文辞典・教学篇』での「妙法蓮華經の五字」の解説は、  
「積尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す」等、『観心本  
尊抄』のご文のみを用いたものとなっている。

脈」に「妙法五字を以て上行菩薩に付属  
したまふと云ふ事」、「上行等の本眷属  
に於て妙法の五字を付属するや」、「如  
説修行鈔」に「一部八巻の肝心妙法五字  
の旗を指上て」などとみえる。「観心本  
尊抄」には、「積尊の因行果徳の二法は  
妙法蓮華經五字に具足す」と積尊の因果  
具足の法、あるいは「一念三千を識ざる  
者には仏大慈悲を起し、五字の内に此の  
珠を裏み、末代幼稚の頸に懸けさし  
めたまふ」と一念三千の珠と表現され  
ている外、「寿量品の肝心たる妙法蓮  
華經の五字」、「妙法蓮華經の五字を  
以て幼稚に服せしむ」、「彼は脱此は  
種なり。彼は一品二半此は但題目の五  
字なり」などと述べて、末代幼稚の衆  
生を救う仏種であるとも示されている。

には、「我等此の五字を受持すれば自然  
に彼の因果の功徳を譲り与へたまふ」と  
述べる。」  
と解説しています。  
ここには、「上行菩薩」に要法が付属さ  
れるとの文証に、『法華宗内証仏法血脈』  
と『如説修行抄』のご文を用いています。が、  
同辞書の姉妹編、『日蓮聖人遺文辞典 歴  
史篇』（昭和六十年五月）では、『法華宗  
内証仏法血脈』について、「浅井要麟は  
「かの頭仏末來記の末段の趣旨（三國四  
師）に基き、天台法華宗内証仏法血脈譜を  
模倣した後人の偽作ではあるまいか（『新  
修遺文』別巻、<sup>①</sup>昭和九年）と本書の成立  
に疑義を挿むが」と、偽撰説があることを  
紹介しています。『如説修行抄』は宗祖作  
と判断していますが、最近、「偽撰遺文の  
類型的区分の試み（四）『法華本門宗要  
抄』とその周辺（下）」（平成三十年十一  
月「御書システム」コラム）にて、『法華  
本門宗要抄』との関連等から偽撰遺文と規  
定しています。このことから、『教学篇』  
では、『観心本尊抄』のご文のみから「妙  
法蓮華經の五字」を解説していることにな  
ります。（続く）

このように、妙法五字は、別付属の要  
法であるとともに、それは積尊の因果、  
一念三千の玉、寿量品の肝心、仏など  
の意味を有し、積尊が末法の衆生を濟  
度される大法であるとされる。日蓮は  
この妙法五字の受持に末法の衆生の救  
いが実現するとし、題目受持の信仰を  
宣布した。このことを「観心本尊抄」

（続く）

《新刊書発刊に寄せて》

# 『日蓮遺文解題集成』 発刊余話 へその二二

興風談所 山上弘道

## 《「第Ⅰ類 真撰遺文」の

### 系年変更遺文について》

「第Ⅰ類 真撰遺文」では、真撰と判定した遺文の中で、系年（成立年次）が不安定なものについて、それをできるだけ丁寧な推定することを目指している。

日蓮大聖人は最晩年、弘安三年十二月末頃の『諫曉八幡抄』にて、釈尊を月の光に譬え、ご自身を太陽の光に譬えられて、末法万年の長き闇を照らす御本仏た

るご自覚を宣言されている。我が日興門流はそのお言葉をもって日蓮本仏論を根本宗是としているが、そのご境地は決して一日にして成就されたものではない。十六歳で叡山天台宗の台密寺院清澄寺で出家し、まず密教主体の天台教学を学ばれて以来、建長五年四月二十八日の法華經至上主義のご宣言、龍口法難の頸の座における発迹顕本、流罪地佐渡における天台を迹化像法過時と規定した上での本化上行菩薩のご自覚等々、文字通り血の

出るような長い法義的思索と忍難弘教を経て到達されたものなのである。

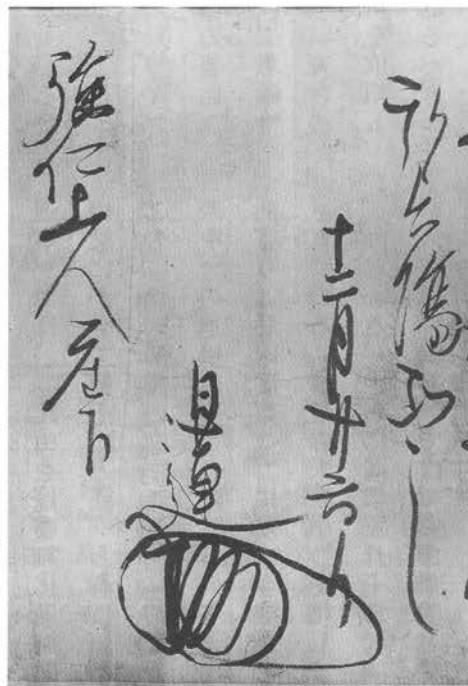
このような大聖人の思想的次第階梯を拝するためには、まずは真偽の分別が不可欠であるが、同様に必須の課題として系年の特定がある。遺文の多くは書状であり、大聖人は特別重要な書状以外は日付だけで年号を記されないから、多くの書状の系年が一定しておらず、諸説あるというのが現状である。それ故に『解題集成』ではこれまでの諸説を紹介した上

で、その内のどの説が良いかを検討し、いずれも妥当ではないと判断した場合は、独自の見解を示している。系年推定は、系年のはっきりしている遺文との関連や、当時の社会情勢や大聖人を取り巻く様々な出来事などの記述に目を配り、また真蹟のあるものは筆蹟や花押の特徴など、できうる限りの情報を検討整理して述べたつもりである。その結果現在の標準的遺文集とされる『昭和定本日蓮聖人遺文』（以下『定遺』）の系年説を変更した遺文は、実に一五四編にのぼった。その全貌は『解題集成』を見ていただくほかないが、今回はその内のいくつかを紹介したいと思う。

○〔I125・正200〕『強仁状御返事』と

〔I128・正205〕『清澄寺大衆中』

『強仁状御返事』は甲斐国在住の僧強仁が、身延に入山された大聖人に対し、書状をもって難詰してきたことに対する返状である。強仁は真言密教を主体とした諸宗兼学の天台僧と思われ、大聖人が法華經至上を掲げ、真言等諸宗を破折す



『強仁状御返事』末尾

ることを批判してきたのである。それに対し大聖人は、仏法の邪正を決することは望むところであり、是非とも公家・武家に奏して公場にて対決をしようではないかと返答されている。

さて『強仁状御返事』の末尾には「十

二月廿六日」との日付のみで年号がなく、従来各遺文目録や遺文集はすべて、大聖人身延入山の翌建治元年に系けている。

しかしまず、強仁の詰問状には「近日当国に来住の由承り及び」と、文永十一年五月の身延入山を「近日」と述べており、かつ末尾には「十月廿五日」の日付があるから、それが記されたのは身延入山のおよそ五ヶ月後、文永十一年十月二十五日たることがわかる。

それを受けて大聖人は早速返状の準備をされた。その思索の跡を示す多くのご草案（下書き）が曾て身延山久遠寺に所蔵され、それは明治八年の大火で焼失したが、幸い久遠寺二六世日暹の模写本が現存する。そこには「予去ぬる正嘉元年より今年に至る十八年の間処々において刀杖を加えられ：：」との文言があり、ご草案執筆が正嘉元年から十八年後の文永十一年であることが判明するのである。そして二ヶ月ほどの推敲を経て、十二

月二十六日にそれは完成し、強仁に返答されたのである。したがって『解題集成』では、これまでの建治元年十二月二十六日説を改め、一年繰り上げて文永十一年十二月二十六日としたのである。

また『強仁状御返事』の系年が一年繰り上がったことで、それと密接に関連する『清澄寺大衆中』も一年繰り上がることとなった。『清澄寺大衆中』は正月十一日付けの書状で、清澄寺の大衆等に対し、真言師蜂起の対策用に弘法の著述たる『十住心論』『秘蔵宝鑰』『二教論』や、天台宗の典籍たる『止観』『天台法華義讃』『輔正記』などの借用を依頼し、「今年は殊に仏法の邪正たゞさるべき年歟」と述べられており、それはまさに強仁等の動きを受けてのことと推測され、それ故に従来『強仁状御返事』直後の翌建治二年正月状とされて来たのだが、これも一年繰り上がって文永十二年（この年四月二十五日に建治に改元）正月十一

日に系けられることとなったのである。

そしてこの移動によって、一ヶ月後の『新尼御前御返事』や二ヶ月後の『曾谷入道殿許御書』の記述内容ともピッタリと符合することとなった。すなわち清澄寺のほど近くに住する新尼御前に宛てられた文永十二年二月十六日状『新尼御前御返事』では、「此由をば委細に助阿闍梨の文にかきて候ぞ」と述べられているが、この「助阿闍梨の文」こそ、『清澄寺大衆中』の追申に「さど殿（日向）とすけあざり（助阿闍梨）」に届けさせたと記されている『清澄寺大衆中』を指しているのである。さらに同年三月十日状『曾谷入道殿許御書』では、太田乗明と曾谷頼しているが、これも『清澄寺大衆中』に見られる書籍借用依頼と軌を一にするものなのである。

○「I 134・正65」『弁殿御消息』と

「I 135・正146」『弁殿御消息追伸』

（『定遺』は『富木尼御前御返事』）

『弁殿御消息』は「千観内供の五味義、孟蘭經の疏、玄義六の本末、御隨身有るべく候。文句十、少輔殿御借用有るべし。恐々謹言。三月十日 日蓮（花押）」

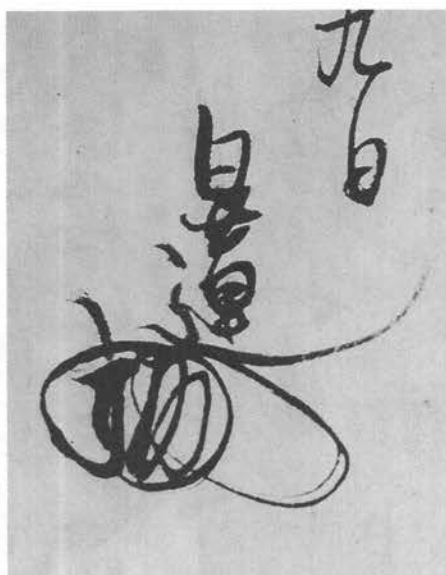
弁殿」という短い書状で、真蹟二紙が池上本門寺に現蔵する。特徴的なのは通常大聖人が使用される、タテおよそ三十二cmほどヨコ四十五cmほどの料紙に比して、タテ二八cmほど、ヨコ二一cmほどとかなり小さな紙が使用されている。

内容は千観撰述の『五味義記』や宗密の『孟蘭盆經疏』、天台の『法華玄義』『法華文句』などの書籍を少輔殿から借用するよう、弁殿すなわち日昭に要請する簡略な書状である。

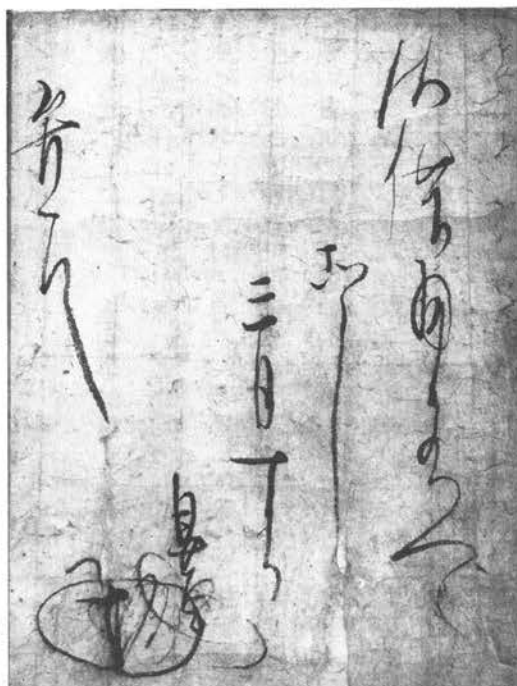
本状を『定遺』は文永六年三月十日に系けているが、大聖人の筆蹟鑑定に定評のある『日蓮大聖人御真蹟対照録』（以下『対照録』）は文永十二年三月十日に

系けている。

まず右掲の『弁殿御消息』（写真右）



文永六年五月九日  
『問注得意抄』の花押



『弁殿御消息』の第二紙

変形の料紙に記されているのは、大著

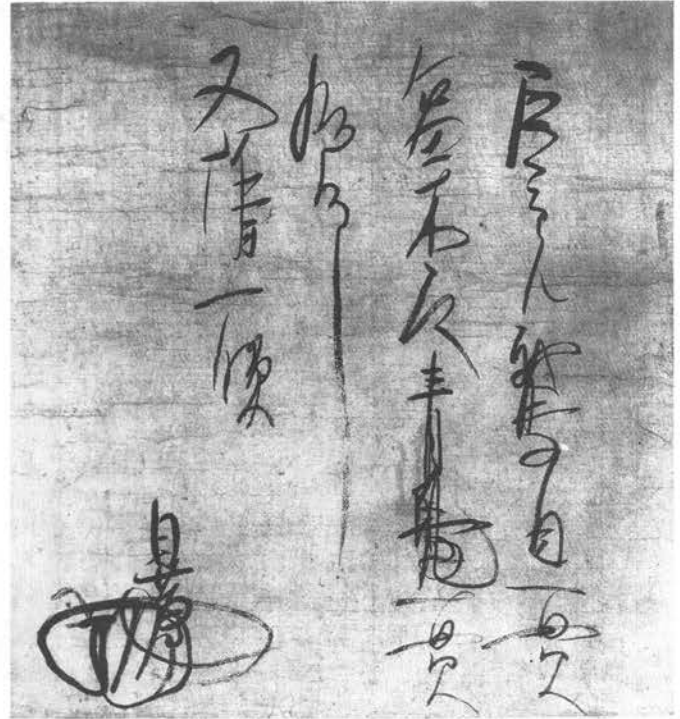
許御書』と共通すること、第二に小さい

よって明確なカギ型の『弁殿御消息』は文永六年状ではない。では『対照録』の文永十二年三月十日説はどうか。第一に種々の書籍借用依頼の内容が、前項で紹介した文永十二年正月十一日状『清澄寺大衆中』、そして同年三月十日の『曾谷入道殿

の花押を見るに、花押の最後に付される空点（左上部）がカギ型である。大聖人は花押の初出文永五年四月五日『安国論御勘由来』から、文永十年四月二十七日『妙一尼御返事』あたりまでは、上掲写真左の『問注得意抄』のように空点は点か短い棒状である（『解題集成』付録一九二頁参照）。

『曾谷入道殿許御書』の執筆、さらに念入りに重ねられた草案の存在（これも日暹模写本が『延山録外』に収録されている）から、用紙が逼迫した故と思われることなどから、妥当な見解と判断される。よって『解題集成』では『曾谷入道殿許御書』と同日の書状と見て、その次に置いている。

次に『弁殿御消息』と関連すると思われる、同じく真蹟が池上本門寺に所蔵される、『定遺』が『富木尼御前御返事』とする書状について紹介したい。その内容は「尼ごぜん鷲目一貫、富木殿青鳧一貫給はり候ひ了んぬ。又帷一領。日蓮（花押）」というごく簡単な書状で、日付と宛名が見られない。『定遺』が「富木尼御前御返事」と命名したのは、文中「尼ごぜん」「富木殿」の文言が見られることによったのであろう。しかしそうになると、富木尼御前と富木殿は夫婦でありながら、わざわざ別々に一貫文ずつを



『弁殿御消息追伸』

供養したことになり、違和感は禁じ得ない。また日付や宛名が無いというのも、単独の書状としては不自然である。

そうした違和感や不自然さは、これを単独の書状ではなく追伸的なものと見れば払拭される。では何の追伸なのか。そこでクローズアップされるのが同じ池上本門寺に所蔵される右に紹介した『弁殿

人宛とされてしまったのである。

ではこの「尼ごぜん」は誰であろうか。それは『妙一尼御前御書』（『定遺』は『弁殿尼御前御書』）の末尾に「弁殿、尼御前に申させ給へ」とあって、同状の内容説明を日昭に指示されているように、日昭と関係が深い妙一尼であろうと思われる。つまりこの追伸は日昭に対し、

御消息』である。先に述べたように同状は通常より小さな紙に記されているが、この追伸と思われる用紙もタテ二九・六cm×ヨコ二八cmと小さな紙が使用されているのである。つまり両者は本来一具のものであったが、それがいつの頃か別々に表具され、それによって別書状として伝来するようになったのみならず、別

「妙一尼に錢一貫文のお礼、そして富木殿に錢一貫文と帷子一領のお礼を、この追伸を披露して伝えよ」と述べられているのである。では何故に追伸にも署名・花押が付されているのか。それは単なる追伸ではなく、領収書の意味合いもあり、それを証するためであったと思われる。

よって『解題集成』では『弁殿御消息追伸』と命名し、『弁殿御消息』と同日の文永十二年三月十日状としたのである。

(つづく)



本書は、読書家の知人が、日米の戦争について、これまで隠されてきた史実を第一次史料に基いて描いていて、史料の読み解きの醍醐を味わってほしいと、一読を薦めてくれた。表紙カバーには、

「戦後、日本人は、陸軍が無謀な戦争へ走らせたのだ、とのレッテルを貼ってきた。しかし、開戦の決断はきわめて合理的な判断の下に行なわれていた事実を、知る人は少ない。理的な判断の主役は、陸軍だった。当時すでに戦争と経済は一体であり、経済抗戦力の比較抜きでは対外戦争は考えられなかった。陸軍は科学的な経済抗戦力研究に基づいて、合理的な戦争戦略を準備していたのである！」

と、「戦争と経済は一体」「経済抗戦力」との視点が示されているが、そのことについては、「まえがき」に、

「第一に『総力戦』の経済的側面を重視しなければならぬとの観点から、戦争戦略の策定における客観的な数字データを読者の皆様にそのままお見せすることにしました。供するものは一次史料です。この一次史料には、当時、

読書案内

松田 銘道



林 千勝 著

『日米開戦 陸軍の勝算』

祥伝社  
定価 八〇〇円

陸軍省内で実際に行なわれた戦争シミュレーションが含まれます。「開戦」の決断を後押しした戦争戦略の策定プロセスにおいて、枢要な位置を占めていたイギリス、アメリカの経済的な側面を重視した戦争シミュレーションです。本書では、このシミュレーションを当時と同じ形で体験していただきます。このことにより、対米英戦開戦という空前の意思決定を行なった英機首相や松山元参総長と、そこに至るまでの思考過程を共有することになります。同じ目線を持っていただきます。要するに、読者の皆様による「開戦」の決断過程の追体験です。」

と綴っているように、本書は経済的側面から「開戦」を検証したシミュレーションを追体験するように構成されている。検証の事実を伝えているのが、一次史料の「陸軍省戦争経済研究班」の調査報告書英米合作経済抗戦力調査（其一）」（昭和十六年七月）の「序論」。

この史料は巻末にも収録しているが、東京大学経済学図書・経済学資料室のデジタルアーカイブでも閲覧できる。

## 【採過拾新録】

## 『超人・奇人 清野謙次博士について』

田中日佐夫著 『美術品移動史』

—近代日本のコレクターたち—より

(日本経済新聞社 昭和五十六年十一月二十日刊より)

連載「大石寺目薬と清野謙次」永らく  
休筆中ですが、何とか再開する予定です。  
それまで、とりあえず手近な史料を掲載  
しますので、世間の常識では捉えきれな  
い博士のスケールの大きさ、数奇な生涯  
の一端を偲んで、一遍のお題目のご回向  
をお願いします。

\*\*\*\*\*

学生の頃だった。虫干し期間中の神護  
寺をクラス全員で訪ねたとき、私は初め  
て清野謙次の名前を聞いた。案内の先生  
が同寺所蔵のいわゆる神護寺経の前にし

て「清野謙次というえらい先生が、もと  
もと蒐集癖の非常に強い人だったのだけ  
れど、きつとその蒐集癖が病的になっ  
たのだろうが、とうとう盗癖に近いところ  
まで進んでしまつてね、この経巻も先生  
の被害にあつたといわくつきのもなのだ。  
ところが事件のあとで警察の手で経巻が  
お寺に還されてきたときには、もとの数  
より大分ふえていた。清野さんが方々か  
ら集めたものを学問的に分類して、前に  
流出していた分まで加えられていたのが  
戻ってきたわけだね」という主旨を話さ

れていた。

不思議な学者もいるもんだな、と私は  
思ったものだった。その後、日本の人種  
論や、アスターナ墓地発掘のミイラの調  
査解説やら、いろんな折々に、この清野  
謙次の名前を目にするのがあつたが、  
その度にこの話が思い出された。

そしてこんど天理参考館の蒐集品の中  
に、清野謙次旧蔵の民俗資料や芸術品が  
大量にあることを知り、あらためて、そ  
の人の略歴を調べて驚いた。いやそれは  
私たちより年上の、清野博士の活躍時期  
を知っている人や、職業がお医者さんで  
ある人たちにとっては常識のことなので  
あるが、人類学者とばかり思っていた  
清野博士は、じつはきわめてすぐれた病  
理学者でもあつたのだ。むしろ病理学者  
であり、のちに人類学者と呼ばれるよう  
になつたのである。

もつとも思えば不思議なことである。  
冒頭で述べた蒐集癖の話にしても、美術  
史学者ならば、まあわからないこともな  
いけれど、人類学者の話にしてはちよつ  
と不可解な話である。——というように、  
この清野謙次という人はまさに一筋縄で

はいかない人らしい。彼自身、昭和二十五年に出版した『人類の起源』という著書の序文の中で「本書は人類起源学の究明であるから、人類学の一部分である。しかし本書で示した所によって明らかなる如く、論題と研究資料のあるものは医学（解剖学、生理学、病理学）に関係し、あるものは理学（生物学）に関連し、またあるものは文学（考古学、民俗学、民族の自然文化史）に関係する。考えようによつては医学、理学、文学の限界上に在る学科である。（下略）」と言っているのである。まさに、いうならば南方熊楠と柳田国男などと同列におかれるべき一種の超人であつたのだろう。

清野謙次は明治十八年（一八八五）岡山市に生れた。父勇は岡山県立医学校長兼病院長、のちに大阪府立医学校長をつとめた人であつた。明治四十二年京大卒、同大学病理学教室助手、講師、助教授を経て教授、その間病理学における生理学的研究の導入をはかり、「生体



清野謙次博士

染色法についての研究」を出版し、大正十一年生体染色研究に対し学士院賞授賞、その業績にいまも高く評価されている。また京大内部における力も相当に強大なものであつたらしい。京都百万遍の近く、

関田町に残っている旧清野邸は、いま専売公社の官舎となつており、その官舎は十軒ある。しかし、近所の古老の話だと、「あの先生のお屋敷はいまの官舎の南側にある百合合幼稚園からまだ南まで続いていて、十戸の官舎は全体の七分の一位

にしか当らない」という。昔の帝大教授の力を知るとともに、清野謙次という人がいかに力と富とを備えた学者であつたかがわかる。

ところが、大正十年頃から病理学者清野謙次は、急速に人類学者清野謙次に移行していく。そしてとくに日本人種論において多くの画期的な業績をあげた。彼は病理学者らしく、いままでの文化類型学的方法よりも、人骨収集と計測による実体論的研究方法を実践した。「先史時代の人骨約八〇〇種他に日本本島周辺の諸地域の人骨を含む約七〇〇種を収集計測し、コロボツクル説に変わったアイヌ説の誤りをも実証的に指摘した」（平凡社『人名辞典』）

彼はそういう資料収集の過程のなかで、その蒐集癖を昂じさせていったのである。自分の当面の資料を貪欲に集めるばかりではなく、それは周辺学問の諸分野に拡大して、膨張していったのである。清野先生記念論文集第三輯の学歴及び業績略記によると、すでに大正十一年の頃に「この少し前より京大医学部門下生と協力して日本全土にわたり石器時代人骨

の発掘蒐集につとめ、更にアイヌ人骨の蒐集に及ぶ。此蒐集は後年本土周辺の人骨を併せて千五百体に及んだ」という。

また京都大学の国史学研究室には「清野謙次氏所蔵文書目録」という昭和二年の筆写本があつて、その頃すでに明治の国会開設前後の文書で、国史学で筆写しておかねばならない程の史料を蒐集していたことを示しているのである。

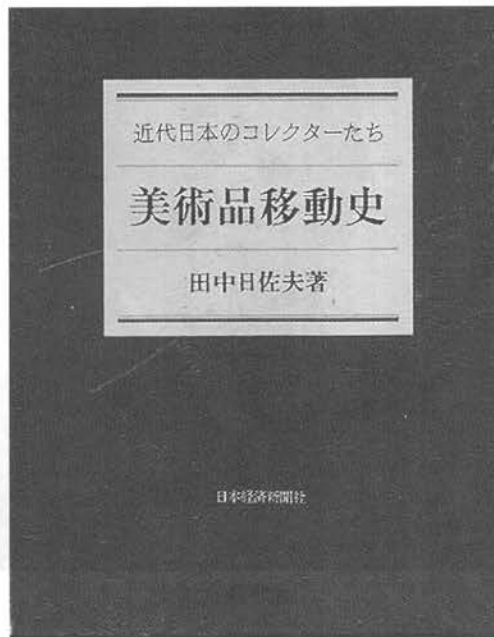
しかし、昭和十三年頃彼の蒐集癖の結果はついに刑事問題として表面化し、親しい友人であつた浜田耕作が総長であつた京都大学全体を震撼させると共に、一般社会をもセンセーショナルなニュースの中にまきこんでしまった。

彼はついに京都大学教授を退官して、のち戦後は茨城県稲敷郡木原村に研究所を作つて居住した。そこは霞ヶ浦湖畔の静かな村であつたが、五十歳半ばの彼はそこで過去三十年間にわたる人類学の研究成果を『古代人骨の計測に基づける日本人種論』『日本考古学史、人類学史』『日本貝塚の研究』の三部作にまとめ、昭和二十三年には東京に移り東京

医大教授として学界にも復帰して、昭和三十年十二月二十七日七十歳で亡くなつた。

### 清野博士の蒐集品とその移動

彼は自分の蒐集方法に対してほとんど



罪の意識はなかつた。度を越した蒐集癖の蒐集癖たるゆえんかもしれないが、どうもそれだけではないようだ。たとえ下次のようなこともあつたという。

かつて、大寺院は、多かれ少なかれどの寺院も伝世貴重な文化遺産をすべて寺院財産として正確に記帳し、員数確認を

しているということはなかつた。住職も、僧侶も、寺男も、各々が文化遺産の価値がわからないままに、各自が自由になる寺院の部分を持つていたのである。寺になん回もたずねてくる帝大の先生が、顔見知りになつた寺男に当時の常識を上廻る額の金銭を土産代りだと渡せば、寺男の方は恐縮して裏の一隅か納屋の中にも転がっている虫の食つた古いお経や色あせた仏具を先生の帰りに自分の一存でお土産として渡したとしても不思議ではなかつたろう。先生はまあご好意はありがたくお受けしておこう、といって持ち帰る、こういうこともあつただろう。

### 田中日佐夫著『美術品移動史』

また、清野謙次の研究テーマの主要部分を占めていたアイヌ関係では次のようなこともあつたようだ。アイヌ人の生きた民俗資料を蒐集するため、その新墓をあばいたこともある。そのとき民俗資料を取り出してそのあと埋めもどす日当も人夫に渡しておいたのだが、人夫は手間賃だけふところに入れて墓はそのままにして帰ってしまった。そういうところからことは露見してしまつたこ

ともある。

そういえば数年前の天理参考館の所蔵品を展示した「中国古代美術展」の中に唐時代の「木製握（竹裂）」という古裂の美しい遺品があったが、それもかつて清野博士がトルファン出土のミイラの手固くにぎりしめられていたものをねじり取ってきたものだという。

いずれにしろ、病的に昂進した蒐集癖は、民族偏見や資料の非現地主義とか、そういう反省すべき考え方をすべて「学問の為」という大義名分の下に一顧もかえりみないまま、資料集めに狂奔していたのだ。そしてこのようにして蒐集した膨大な資料は、事件の後あるものは所有者に返還されたものの、大部分は京都大学研究室あるいは関田町の自邸から数カ所にあつた別荘に移され、また霞ヶ浦の研究所へ移されていたのである。

その膨大な蒐集品を手離したい。しかるべきところで買ってもらいたい、という意向が二代真柱のもとに伝えられたのは、戦後も間もない頃であつた。その紹介者は反町茂雄氏（東大法学部を出て一誠堂の番頭になり、のち弘文荘代表取締役

になつた人であるが、この人については後にもふれる）であつた。しかし、真柱にしてもいわくつききの代物をそう気安く買うこともできなかったのであろう。話のはのびのびになつて、ついにそれを購入しだすのは昭和二十七年になつてからであつた。最初、真柱が反町氏に連れられて霞ヶ浦の清野宅をたずねて、自分で選んだ五、六の資料類を購入してきた。

そしてそれを皮切りに、その後は福原喜代男氏が月に一、二回ずつ、清野宅をたずねて、購入を続けることになつた。値段の決定はいつも反町氏が立ち会い、長らく続けて行われたが、毎月百万から二百万円の金を払つていた。

昭和二十七年の収蔵は九〇〇余点にのぼるが、そのうちめだつものとして清野謙次旧蔵の南北アメリカ古代遺物（四六五点—プレ・インカの模様織裂や土器ならびにその破片）があり、昭和二十八年（一九五三）には清野謙次旧蔵のアイヌ関係資料（酒箸〔ひげべら〕・刀装具などを主とする一、〇〇〇余点）とか中国殷々唐代に至る各種金具・容器・鏡鑑および日本石器時代関係（主として貝塚

出土）資料などがこうして収納されたのである。その中にはミイラからはいだ衣服類などがあり、資料としての価値の高さは言うをまたぬところであつた。

田中 日佐夫（たなか ひさお）

日本の美術史学者。専門は日本美術史。成城大学名誉教授。一九三二年二月七日生—二〇〇九年五月十五日死去。

岡山県岡山市生まれ。香里高等学校、同志社大学短期大学部英語科卒業後、立命館大学文学部史学科に編入した後、立命館大学大学院文学研究科日本史学専攻修士課程修了。龍村織物美術研究所、滋賀県教育委員会文化財保護課に勤務。その後、一九七二年に成城大学文芸学部助教授、一九七九年に教授となる。一九八四年『日本画 繚乱の季節』でサントリ―学芸賞受賞。一九八八年『竹内栖鳳』で芸術選奨文部大臣賞受賞。一九九四年秋田県立近代美術館館長に就任。一九九九年紫綬褒章受章。二〇〇三年成城大を定年退任、名誉教授。二〇〇四年、旭日小綬章。二〇〇五年に秋田県文化功労者として表彰を受ける。

# 恵日だより

## 節分会

二月三日（土）午後七時



豆をまく年男の大谷信哉さん（節分会）

一年の中で一番寒が極まると言われているこの日も、夕方に近づくにつれ次第に寒さが厳しくなりましたが、午後七時より恒例の節分会が奉修されました。

定刻の午後七時、出仕鈴が鳴り響く中、ご住職が出仕され、読経唱題が始まった節分会は、途中御宝前にお供えしていた福豆を、ご住職が「福は内」のかけ声と共に、御宝前、本堂内四方にまかれました。

引き続き、読経が続く中、今年の干支が辰年で、年男にあたる大谷信哉さん、それに柴田百恵さんが、「福は内」、「福は内」のかけ声とともに、本堂内に豆やお菓子がまかれました。

終了後、ご住職より、平安時代の主に宮廷で鬼遣と言つて、色々な邪鬼を払うのに豆を打つ習慣が始まり、その習慣が現在においても節分会の豆まきの行事となつて続いているのです。大聖人の時代にも、多くの災難に見舞われても厄を転じて幸いとなす、という御書が残されています。今年も年頭から大きな災難がありました。今年も年頭から大きな災難が得や自分中心の考えが蔓延していますが、

第一に正邪を判断し、厄を正面から受け止め、挫けることなく試練を乗り越え、正しい信仰のもと、災い変じて幸いと転ずるよう、精進していただきたいとお話があり、午後八時前には散会となりました。

## 興師会

二月七日（水）午後一時

二月に入っても寒い日が続いていますが、この日もそのまま朝から寒い一日となりましたが、午後一時より源立寺本堂において、御開山日興上人の御恩徳を御報恩謝徳申し上げる、興師会が奉修されました。

法要は、定刻に開始され、献膳、読経唱題と如法に進められ、法要終了後、ご住職より「原殿御返事」を通して、日興上人の身延離山の経緯こそが、本師の正義、護法の一点に尽きる信仰精神であり、私たちが学ぶべき富士門流本来の信仰のあり方について、法話がありました。

## 御誕生会

二月十一日(日) 午後一時

寒暖差の激しい日が入れ替わりとなつて体調を維持するのが難しい日が続きましたが、この日は朝から好天の、御誕生会となりました。

宗祖日蓮大聖人御誕生八〇三年のこの日、午後一時から第二日曜日の月例お講にあわせて、御誕生会が奉修されました。

法要は、参列された方々が厳肅に唱題される中、出仕鈴が打たれると、出仕されたご住職によつて献膳がなされ、その後、法要は如法に進められ、読経唱題が終了後、「四条金吾殿御返事」を引用しながら、法華経が説く「衆生所遊楽」とは、いかなる幸不幸に直面した時にも、お題目を一心に唱える事によつて安心立命の境地が保て、やすやすと乗り越えていける信心修行が肝要との、法話がありました。

## 役員研修会

一月二十八日(日) 午前十時

一月二十八日(日)、恒例の役員研修会が、幹事、婦人部役員、地区役員が源立寺本堂に集つて開催されました。

まだ寒波の影響で、肌寒い一日となつたこの日、参加した幹事・役員は、真剣



ご住職の講義を受ける参加役員(役員研修会)

な面持ちで研修に臨みました。

午前十時、ご御住職の導師による読経唱題の後、開会にあたり、森講頭から、役員研修会を開く意義等について挨拶がありました。

午前のご住職の講義では、正信覚醒運動について自身の体験を交えて、自身では、一、お寺は経蔵や講堂があつて学校の役目を兼ねていた。学問の興隆を企てながら本がないというのでは始まらない。そこで専門図書館(文庫)を作つて学僧や研究者に提供するつもりで五十年努力してきたが、漸く文庫の形になつてきた。現在は興風談所で管理・利用しているが、保存と公開という相反する目的を果たしながら、微力ながら日蓮教学の興隆に資したい。

二、この間、大聖人の真蹟断簡を感得出来たことは僥倖であつた。

三、大聖人、日興上人以来の本来の正しい精神を取り戻し、浄化することに生涯務める。

とのお話がありました。

また、創価学会の政界、経済界への影響力、特に日蓮正宗宗門への掌握戦略に

ついて、配布されたレジュメを元に、詳細な講義がありました。

昼食後は、三月に開催される地区総会で取り上げるテーマについて、各地区ごとに役員が別れ、それぞれ意見を出し合っ  
て討議し、終了後、ご住職の題目三唱をもって、研修会は無事終了しました。

案内のお知らせ

\* 春季彼岸会のご案内

今年の春季彼岸会は、三月二十日(水)午後一時から奉修いたしますので、  
講員各位におかれましてはご参集の程よろしく願います。

\* お彼岸の塔婆はお早めに

春季彼岸会は三月二十日(水)午後一時からの奉修ですが、法要当日は混雑いたしますので、お塔婆はお彼岸前に、なるべく早い事前のお申込みをお願いいたします。

\* 地区総会開催のご案内

今年の地区総会が、左記の日程で開催

されます。

講員の皆様には、所属地区の日時に合わせてご参集いただき、地区の講員同士

が顔を合わせての楽しいひとときを過ご  
しましょう。  
※日程は、行事予定表を参照下さい。

【弥生詠草】

飛ぶやうに 甲子園まで 行く息子

〔和風〕

たびたび雲行き 気にしつ揚ぐ

中学の 制服はをり ポーズ取る

娘の 高き 広き肩巾

【恵日俳壇】

〔農婦〕

種芋植う明日はほどよき雨と聴き

色褪せし男所帯の紙難ひい

〔森 秀之〕

雪残る三角点が県境

雪残る踏み跡たどりランニング

頂きに続く岩場に雪残る

〔吉田 裕〕

暮の春スマートボール打ちつくし

吉祥天を妬みて鳴けり葦



【節分会】

災いを転じて

福となす修行を

—住職のお話—

皆さんこんばんは。

本日は、節分会の豆まきにあたりご参詣大変ご苦労様でした。この豆まきの行事は、日本の古い時代からの習俗であつて、飛鳥・奈良時代からすでに主に宮廷で鬼遣<sup>おにや</sup>らいといつて、いろいろな邪気を払うために豆を打つたことが、記録に残る始まりのようです。

一年で一番寒い、寒の極まった時で、日照時間も短い時節ですから、いろいろな感染症も流行します。今でもコロナウイルスとインフルエンザが同時に流行しているようですが、昔も同じようなことだったのでないかと思ひます。そういうわけで、その時期に特に健康に気をつけるために、こうした行事が脈々と承継がれてきたのではないかと思ひます。

鎌倉時代の日蓮大聖人の時も、弟子檀那の災厄ついて、この法華経をもつて厄を転じて幸いとなすようにという、数編の御消息文が残っております。

我われもまた令和の時代、いろいろな邪鬼が横行していますが、そういうものにも負けないよう、この法華経の信仰をしつかり持つて精進して行かなければならないと改めて思ふのです。

取り分け、今年の日本は、年頭からいろいろな災厄に見舞われており、この先もまたいろいろな災難が降りかかってくる予感がします。

恐らくこれも、大聖人が「立正安国論」の中で示されたように、国中が、一國が謗法と化している、謗法ということ、は正しい法に背くということであつて、確かに今の日本人は、正しいことと邪しまなこと、いわゆる正邪、善悪ということとよりは、損か得かということを考えているのです。しかし、物事を判断する基準には必ず順序があつて、まず最初第一にくる基準は正邪・善悪を中心に置かなければならないはずと。ところが、貪欲の病にかかった衆生は、正邪は二の次

にして、利害・損得の計算ばかりは抜けて目なく、利他の精神など思つてみたこともなくなりませう。そこに「石が流れて木の葉が沈む」ような要因がつもりませう。

もう一つは、自分のことさえ良ければというような我慢偏執の風が蔓延つて、見捨てられる衆生や国土もふえて世の中が無縁化し分断化されて行くような方向にあるのだと思ひます。

しかし我われが反宗教的な風潮の強まる中で、信心を貫くということは、そのまま修行となり、功德となり、災いを転じて幸いとする道に通ずるのです。

必ず難に遭つて成長があるのです。ましてや世のため、法のためです。もしもいろいろな災いに見舞われたとしても、少しもくじけることなく、また逃げ出すことなく、お題目を唱えて、苦難を正面から引き受けて頑張つて行きたいと思ふのです。

どうか今年一年、いろいろな難があつても、少しもそれに負けないで、強い心をもつて、それを幸いと転ずるように、後々にも大きな充実感となるように信心修行をしたいものです。



# 三月の行事



- 一日 (金) 午後二時 お経日
- 三日 (日) 午前九時 講中勤行会・幹事会
- 十日 (日) 午後一時 お講・役員会
- 十三日 (水) 午後一時 お講
- 十七日 (日) 午前十時半 兵庫地区総会
- 二十日 (水) 午後二時 豊能地区総会
- 二十日 (水) 午後一時 春季彼岸会
- 二十三日 (土) 午前十時半 槻木地区総会
- 二十四日 (日) 午前十時半 大阪地区総会
- 午後二時 北摂地区総会

※四月号の継命・恵日発送(3月末)は、

『豊能』地区が担当です。

五月号の継命・恵日発送(4月末)は、

『兵庫』地区が担当です。

## ◆地区総会開催のご案内

今年度の地区総会を、左の日程で開催いたします。

講員各位には、ふるってご参加ください。

### 【三月】

- 17日 (日) 午前十時半 兵庫地区
- 同 午後二時 豊能地区
- 23日 (土) 午前十時半 槻木地区
- 24日 (日) 午前十時半 大阪地区
- 同 午後二時 北摂地区

### 恵日

令和六年三月号 通巻三五〇号  
令和六年三月一日発行

編集兼  
発行人

菅野 憲道  
恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一―一〇 源立寺内

TEL (071) 751-3335

E-Mail kanno@wombat.zaq.ne.jp

購読料(含送料)年間二〇〇〇円

加入者名 恵日編集室会計

〒振替 口座番号 0138012112649